

イチゴ「熊研い548」における短期間低温暗黒処理の効果

○田尻一裕・坂本豊房・小野誠
(熊本農研セ)

【目的】

熊本県で育成したイチゴ「熊研い548」は、頂花房の花芽分化期がやや遅く、低コストな低温暗黒処理等による花芽分化促進技術の確立が急務となっている。

本試験では、「熊研い548」の収穫早進化を目的に短期間の低温暗黒処理が頂花房の花芽分化、開花特性及び収量性に及ぼす効果を検討する。

【材料及び方法】

品種は「熊研い548」を用い、試験区は定植日として9月16日、19日、22日、25日の4区を、低温暗黒処理期間として3日間、5日間の2区を設定し、対照として普通育苗（9月27日定植：花芽分化確認後定植）を調査した。

採苗は2008年5月28日～6月11日に受け苗で鉢受けし、6月23日に切り離しを行い、育苗施肥は置き肥N140mg/鉢と液肥を施用し、最終追肥は低温暗黒処理35日前（普通育苗は8月15日）に行った。低温暗黒処理は温度16℃で行った。

本ぼ施肥（kg/a）はN、P₂O₅、K₂Oそれぞれ基肥が0.6、2.0、0.2、追肥が1.6、0.98、1.16とした。マルチは10月9日～16日に行い、天井ビニルは10月22日に被覆した。栽植様式は畝幅1.2m、株間23cm、2条千鳥植え、外なり（724株/a）で、本ぼの調査は1区20株2反復とした。

【結果及び考察】

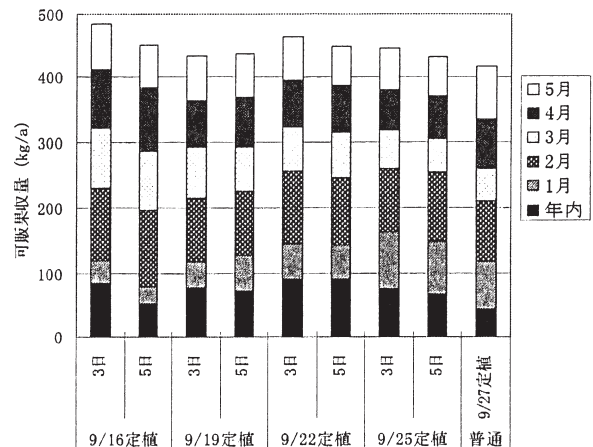
定植時の花芽分化は、9/16定植及び9/19定植ではほとんど未分化であった。9/22定植の5日間及び9/25定植は全株花芽分化が確認できた。

定植4日後は、9/16定植、9/19定植ともに未分化株があり、定植日が遅いほど花芽分化は安定し、分化程度が進む傾向にあった。

出蕾株率は9/16定植、9/19定植ともに出蕾にばらつきがみられが、9/22定植、9/25定植ともにいずれも100%となり、対照区に比べ9/22定植で出蕾日は約6日、開花日は約8日早かった。

年内収量及び早期収量（2月までの収量）は、9/22定植が最も多く、総収量は9/16定植及び9/22定植が多く、いずれも対照より多かった。

以上の結果から、イチゴ「熊研い548」の短期間低温暗黒処理は、普通育苗より早い花芽分化確認後の定植が可能となり、収穫の早進化が図られた。本試験では、9/22定植が頂花房の花芽分化及び早期収量の確保の面で総合的に優れた。



第1図. 時期別可販果収量

第1表 頂花房の花芽分化及び開花特性

試験区	定植日	入庫期間	頂花房の花芽分化		期間出蕾株率 %	頂花房		
			定植時	定植4日後		出蕾日	開花日	収穫始期
	9/16	3日	×××××××	××××③⑤	72.5	10/16	10/31	11/28
	9/16	5日	×××××××	×××③③④	42.5	10/16	10/29	12/1
	9/19	3日	×××××××	××②②③③	75.0	10/21	11/3	12/5
	9/19	5日	×××①①①①	××②③③④	62.5	10/19	11/1	12/3
	9/22	3日	××①①①①①	×①②③③③	100	10/22	11/6	12/9
	9/22	5日	①①①①①①①	③③③④④④	100	10/22	11/5	12/5
	9/25	3日	①①①①①①②	②②③③④⑤	100	10/24	11/8	12/12
	9/25	5日	①①①①①①②	③④④④④⑤	100	10/24	11/8	12/12
	9/27 (普通育苗(対照))		①①①②②③	-	100	10/29	11/14	12/16

注1) 花芽分化：×：未分化，①：肥厚初期，②：肥厚中期，③：肥厚後期，④：二分期，⑤：ガク片形成期
 注2) 期間出蕾株率および出蕾日は普通育苗の最終出蕾日（11月2日）までに出現した株の割合と平均日を示した。
 注3) 開花日、花房数及び花数は普通育苗の最終開花日（11月19日）までに開花した株の平均値で、収穫始期は2割以上の株が収穫となった日を示した。